2007. 1. 26

The Japan Academy of Midwifery Newsletter No.52

日本助産学会ニュースレター

発行所　日本助産学会
〒102-0071
東京都千代田区富士見1－8－21
東京都助産師会館内
電話・FAX　03－3221－0417
e-mail：jam1987@ninus.ocn.ne.jp
代表者　堀内成子

巻頭言

「助産業務の将来と教育」

桐生短期大学　教授　青木康子

助産は人間社会特有の行為であり、ましてその行為をもって職業とする、すなわち助産業務として通用しているのは人間社会でしかみられません。したがって、人間社会が滅亡しない限り、今後とも助産業務は存続するものと考えられます。問題は、助産業務をどんな人が担当するのがベターかということであり、それによって教育内容も変わってきます。誰が最もふさわしいかは、当然、その背景として各々の国・社会の生い立ちやその発展過程が影響します。

我が国では、助産が職業として成り立ったのは江戸時代であり、その後、その業務・教育について、看護職の中では最も早く法制化されています（明治32年　産婆規則）。昭和に入って、第二次世界大戦後、日本は敗戦という事態から諸制度が大きく変わりました。特に、助産師の教育は、基礎看護教育を受けてから積み上げられる専門領域の教育としての位置づけとなりました（昭和23年　保健婦助産婦看護婦法）。この形になるには、当時、保健師助産師看護師の資格の一本化に対する助産師界の抵抗があったことは事実です。また、カリキュラムの改正がおこなわれる都度（昭和42年・平成元年・平成９年）、議論されてきました。その他、男子の助産師資格取得についても、男女共生社会や教育の機会均等などに関連して討議されてきました。今後もこれらに関しては議論されてゆくことでしょう。特に今年は、教育基本法が変わり、憲法改正についても論じられています。いずれも21世紀を担う若者たちがどう考えるのかにかかわってきます。

助産業務についても、子産み子育てに関する業務を担うものは誰がベターなのか、受益者である女性とその家族、共益者である助産師、一般社会の若者と熟年者などの考えが大きくかかわると考えられます。しかしながら、出産の本質は生命の継承・種族の維持であり、その行動は本能的行動の延長線上にあることは云うまでもありません。人間社会では、科学が進めば進むほど、本能的行動がとれなくなります（セックスレス・少子化）。一方、科学の進歩に歯止めをかけることができるのは人間でもあります（倫理や家族愛の復活、エコロジーの台頭）。

日本の助産師は、自然分娩を尊重し、産婦に寄り添い、子育て支援・セクシュアルライフの充実に力を注ぐことを伝統としてきました。昨今の社会情勢は、そうした助産師のありよう（専門職業人としての業務）に少なからず気づいているように思われます。この機を逃さず、助産業務の推考と教育の充実（理論の確立と実践力の確保）を推進し、社会のニーズに応えたいものです。

Japan Academy of Midwifery

第21回日本助産学会学術集会のご案内(第３報)「求められる助産師の自律　―地域との連携のもとで―」

第21回日本助産学会学術集会会長　宮　﨑　文　子

第21回日本助産学会学術集会の第３報をお届けいたします。プログラムが完成いたしました。
詳細は第21回日本助産学会学術集会のホームページをご覧ください。
皆様の多数のご参加をお待ちいたします。

１　期　日　2007年３月10日（土）～11日（日）
２　会　場　B-Con　Plaza　ビーコンプラザ：大分県別府市山の手町12－１
３　プログラム

＊第１日　３月10日（土）　10：30～17：30

８：30～９：00	理事会（場所：31会議室）
９：00～10：00	評議員会（場所：31会議室）
９：00～	受付開始
10：15～10：30	会場オリエンテーション
10：30～10：35	開会式（会長あいさつ）
10：35～11：15	会長講演「求められる助産師の自律」 演者：宮﨑文子（大分県立看護科学大学） 座長：毛利多恵子（毛利助産所）
11：20～12：20	基調講演「プロフエッションとプロフエツョンの教育」 演者：山田礼子（同志社大学教授兼教育開発センター副所長） 座長：堀内成子（聖路加看護大学　日本助産学会理事長）
12：30～13：20	総　会（場所：Ａ会場フイルハーモニアホール）
13：30～14：20	教育講演Ⅰ「思春期の心身医学から見た子育て」 演者：森　　崇（北九州津屋崎病院副院長） 座長：小林益江（日本赤十字九州国際看護大学）
14：30～15：20	教育講演Ⅱ「サルのお産と母と子のきずな」 演者：松井　猛（日本霊長類学会会員） 座長：伊東くり子（大分県立病院）
15：30～17：30	シンポジュウム「地域と助産師の連携」 演者：・助産院経営の立場 矢島床子（母と子のサロン　矢島助産院） ・医療機関内のオープンシステムの立場 上田たかこ（愛和病院兼サマリア・ハウス上田助産院）

15：30～17：30	・母乳育児の立場 平田喜代美（平田母乳育児コンサルタント） ・性教育活動の立場 安倍本子（あべ助産院） 座長：江角二三子（日本助産師会事務局） 皮野さよみ（九州医療センター附属福岡看護助産学校）
18：00～19：30	懇親会（場所：ビーコンプラザ２Ｆレセプションホール）

＊第２日　３月11日　９：30～15：30

８：30～ ９：20～9：30	受付開始 オリエンテーション
９：30～10：30	特別講演「アフリカの助産師の自律」 演者：徳永瑞子（長崎大学大学院） 座長：平田伸子（九州大学医学部保健学科）
10：30～12：00	ワークショップ「助産科誕生：その背景と実際　そして展望」 演者：三浦　徹（薫風会佐野病院産婦人科医師リーダー） 石村朱美（薫風会佐野病院助産科助産師） 座長：鈴井江三子（川崎医療福祉大学）
12：10～12：55	ランチョンセミナーⅠ「より美しく・より健康に：女性のライフサイクルの変化と低用量ピル」 演者：種部恭子（女性クリニックＷｅ（ウイ）富山院長） 座長：佐藤香代（福岡県立大学看護学部） ランチョンセミナーⅡ「思春期の性感染症とその予防：今私たちにできること」 演者：赤枝恒雄（東京都赤坂六本木診療所長） 座長：平澤美恵子（日本赤十字看護大学）
13：00～14：00	ワークショップ「医療機関における助産ケアの質を考える」 演者：斉藤益子（東邦大学医学部保健学科） 座長：佐山静江（独協医科大学病院）
14：00～15：30	ワークショップ「日本の助産師と国際協力」 演者：大石和代（長崎大学医学部保健学科） 入山茂美（長崎大学大学院） 座長：菅沼ひろ子（宮崎県立看護大学）
９：30～15：30	一般演題発表（口演：中会議室・国際会議室、 示説：１Ｆ　コンベンションホール）
15：30	閉会式

4　一般演題発表

1）口演　2007年3月11日　9：30～15：30

時　間	カテゴリー	発表会場	カテゴリー	発表会場
9：30～10：45	1群　助産師教育	中会議室	5群　子育て支援	国際会議室
10：45～12：00	2群　思春期教育	中会議室	6群　助産ケア	国際会議室
13：00～14：15	3群　母乳育児支援	中会議室	7群　助産管理	国際会議室
14：15～15：30	4群　周産期ケア	中会議室	8群　女性の健康	国際会議室

2）示説

①会場　1F　コンベンションホール

②掲示時間および質疑応答時間

・掲示準備：8：30～9：30　　・掲示時間：9：30～15：30

・質疑応答：13：30～14：30　　・取り外し：15：30～16：00

③ポスターの作成要領

・パネルのサイズは、横90cm、縦180cmです。

・ポスターの掲示に必要な押しピンは会場で準備いたします。

・パネル上段左端の演題番号は学会本部で準備いたします。

・演題名、氏名、所属の表示は、横70cm、縦20cmの大きさで各自ご準備ください。

5　プログラム概要

◎第1日目　2007年3月10日（土）

会場／時間		9：00～	10：15～10：30	10：30～10：35	10：35～11：15	11：20～12：20	12：30～13：20	13：30～14：20	14：30～15：20	15：30～17：30		18：00～19：30
エントランスホール		受付開始										懇親会 注）レセプションホール
A会場 フィルハーモニアホール			会場オリエンテーション	開会 会長挨拶	会長講演	基調講演	総会	教育講演Ⅰ	教育講演Ⅱ	シンポジウム		
31会議室	8：30～9：00 理事会	9：00～10：00 評議員会										

◎第2日目　2007年3月11日（日）

会場／時間		8：30～	9：20～9：30	9：30～10：30	10：30～12：00	12：10～12：55	13：00～14：00	14：00～15：30	15：30
エントランスホール		受付開始							
A会場 フィルハーモニアホール	口演		会場オリエンテーション	特別講演	ワークショップⅠ	ランチョンセミナー1 講師：種部恭子	ワークショップⅡ	ワークショップⅢ	
会場／時間				9：30～10：45	10：45～12：00		13：00～14：15	14：15～15：30	
B会場 中会議室	口演			第1群助産師教育1-5座長：島田啓子	第2群思春期教育6-10座長：高田昌代		第3群母乳育児支援11-15座長：澤田貴美子	第4群周産期ケア16-20座長：砥石和子	
C会場 国際会議室	口演			第5群子育て支援21-25座長：宮中文子	第6群助産ケア26-30座長：小田切房子	ランチョンセミナーⅡ講師：赤枝恒雄	第7群助産管理31-35座長：竹内美恵子	第8群女性の健康36-40座長：谷津裕子	
D会場 1F コンベンションホール	示説			9：30～15：30					
				周産期ケア41-56 ハイリスクケア57-62 助産ケア63-71 助産管理72-74 助産師教育75-86	母乳育児支援87-93 子育て支援94-107 女性と家族の健康108-110 思春期教育111-114 チーム医療115-118		生殖医療ケア119 助産の歴史120-122 DV・子ども虐待予防123-125 スピリチュアルケア126-127 母性看護学教育128-130		
	展示	展　示							

6　参加費

1）学術集会参加費

①前納（2007年１月31日まで）

会員：8,000円、　非会員：9,000円、学生（大学院生除く）：4,000円

②当日

会員：10,000円、　非会員：12,000円、学生（大学院生除く）：5,000円

注）2007年１月31日までにお支払いの方に、学会集録を事前に送付致します。

2）懇親会参加費

①前納（2007年１月31日まで）

会員・非会員：5,000円

注）事前申し込み者のみのご参加となります。ご了承ください。

7　学術集会および懇親会参加費事前申し込み先

1）銀行振り込み

大分銀行　本店営業部　（普）口座番号　5539868

口座名義　株式会社大分航空トラベル代表取締役社長　植木宣治（変更）

2）郵便振込み

口座記号番号　01750－7－132917

加入者名　第21回日本助産学会学術集会

注）２月１日以降は、口座は閉鎖いたしますので振込みはできません。

なお、払い込まれた参加費は返却いたしません。ご了承ください。

8　会場案内

会場案内は学会ホームページ：http://www.oita-nhs.ac.jp/~oita21/をご利用ください。

9　宿泊先の案内

（株）大分航空トラベルに直接ご連絡ください。

営業時間：9：30～18：00（月～金)、9：30～13：00（土）です。

TEL：097－536－0101、0102、　FAX：097－536－0021

10　連絡先

第21回日本助産学会学術集会事務局

郵便番号870－1201　大分県大分市大字廻栖野2944－9

TEL：097－586－4404　　FAX：097－586－4381

大分県立看護科学大学　母性看護学・助産学研究室（担当：安部・関屋）

国際助産協働セミナーⅡ　in　長崎の報告

国際助産協働委員会　森　兼　真　理

2006年10月14日（土）第47回熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会サテライト集会　日本助産学会　国際助産協働セミナー　in　ながさき「助産と国際協力」が行われた。

午前の講演では、UNICEF保健セクション保健戦略上級アドバイザーの國井修氏が、「世界のSafe motherhood の動向と日本の課題」について妊産婦死亡は①受診の遅れ②医療施設へのアクセスの遅れ③適切な医療の遅れがある。乳幼児死亡対策は成功してきたが妊婦へのケアの遅れにたいして、Quality of birth　の視点からの支援が必要とされると強調された。

長崎大学国際連携研究戦略本部コーディネーターの　松山章子氏はネパールのフィールドワークから①女性の健康問題を社会・文化的文脈から考察する②女性の健康問題に対して、医療視点は部分的なものである③女性の健康改善にはマルチ・セクトラルな取り組みが必要であることについて理論的枠踏みを説明された。

午後のシンポジウムでは、「出産ケアと国際協力」では、出産ケアの質とケアについてボリビアの経験（田中幸恵氏・トヨタ記念病院）マラウイの経験（入山茂美氏・長崎大学大学院講師）、ザイール･中央アフリカ共和国の経験（徳永瑞子氏　左写真・長崎大学大学院教授）が報告された。

田中氏はボリビアのプロジェクトで、女性の産む力・子供の生まれてくる力を尊重する出産ケアが実践できる安産トレーナの誕生という成果と出産ケアの変化が、共に成長しあう関係形成につながったことを発表された。入山氏は、マラウイのHIV感染率の増加が平均寿命を短縮している事実と出産介助経験の体験を話された。これから協力隊員になる人に対してのメッセージも含まれていた。

徳永氏は民族衣装に身を包み中央アフリカの伝統的産婆（マトロン）の活躍と訓練についてまた、HIV孤児たちやアフリカでたくましく生きる人々を紹介された。

外務省国際協力局の立場から山本氏は、国連開発ミレニアム目標と助産師に役割と期待について熱く語られ、「ブナロード=人々の中へ」という言葉を贈ってくださった。

コメンテーターの長崎大学大学院教授大石和代氏は、日本の開業助産師の経験を途上国に活用する方策について研究されており、シンポジスト（右写真）の講演とともに日本の助産師に対してエールを送られた。

これからこれまで国際協力携わってきた人やこれから携わる人たちにむけて、多くの示唆と知恵が含まれていた。助産ケアと国際協力は多くの接点を持っている。女性のエンパワメントと健康支援・安全な出産ケアへの支援・子供の健康支援など日本の助産の質の高さと精神は、国際保健の舞台で大いに貢献が期待されている。

最後に長崎大学の関係者の皆様には大変お世話になりました。おかげさまで100名近くの参加者がありました。書面を借りしてお礼申し上げます。（文責　森兼）

スタッフの方々

第８回ICMアジア太平洋地域会議報告
“Empowered Midwives, Gateway to Global Health”

国際委員会　加納尚美

2006年10月15日から17日にフィリピンセブ島セブ市ワーターフロントホテルにて、第８回ICMアジア太平洋会議が開催されました。メインテーマは、「地球規模の健康に至る道となるエンパワーされた助産師」日本助産学会からは国際担当理事として私が15、16日のみですが出席させていただき、与えられたスピーチ「日本における助産師教育」を行いました。今回の主催は、フィリピン助産師会で、参加団体は、ニュージーランド助産師会、オーストラリア助産師会、カンボジア助産師会、インドネシア助産師会、アメリカの専門助産師会等です。大多数がフィリピンからの参加者ですが、総勢300名余は集まっていたようです。日本からは、アジア太平洋地域代表の近藤理事、日本助産師会、日本看護協会、他に研究発表のために２名の助産師が参加しておりました。フィリピンの助産師は陽気で、プレゼンテーションだけでなく、歌も踊りも躍動感溢れるものであり、また衣装も南国ならではの色彩というのでしょうか色鮮やかで多数の民族衣装を披露してくれました。以下、簡単に会の様子をご報告いたします。

１．全体プログラム

10月15日（日）　＜午前＞

朝６時に近隣にあるカトリック教会、San Jose de la Montana st. Maboloで参加者は礼拝に出席する。その後、各国の民族衣装を来て、車に分乗してパレードを行う。その後９時に登録開始。

10月15日（日）　＜午後＞

場所：アークティックホテルにて開会式。

開会挨拶　Ms. Patricia M. Gomez（IMAP：フィリピン独立助産師協会会長）
Ms. Karlene Davis（ICM会長）
Ms. Judi Brown（ICM運営役員）
Ms. Sandy Grey（NZ助産師会、アジア太平洋地域代表）

基調講演　Jean Marc Olive, MD（WHO 西太平洋地域代表）
「WHO のミレニアム開発目標への取り組み」

レセプション

開会式：右から３番目会長

10月16日（月）　＜午前＞

全体講演　Dir. Catherine Q. Castaneda（高等教育会、プログラムと基準局長）

講演　Cheryl Benn（ニュージーランドマシイ大学保健科学助産プログラム長）
「ニュージーランドにおける助産師教育」
加納尚美（日本助産学会）
「日本における助産師教育」
Ruth Castro（Dr. Jose Fabella Memorial Hospital助産師学校校長）
「フィリピンにおける助産師教育」
Patricia Brodie（オーストラリア助産師会会長）
「オーストラリアにおける助産師教育」
Nur Ainy Madjid/ Nurjasmi Endomo（インドネシア助産師会会長）
「インドネシアにおける助産師教育」
Vicki Penwell（New Mexico助産師会, USA）
「北アメリカにおける助産師教育」

Dr. Alice de la Gente（ IMAP 助産師学校財団管理者）
「フィリピンにおける助産師教育発展への本財団の貢献」
Loreto Tajonera（PRC助産局メンバー）
「大都市マニラでの選択的助産師学校間での入学アセスメント」
Asuncion S. Esmele　（IMAP財団副会長）
「より高い地位獲得のためのより高等な教育」
Corazon Paras（IMAP Bohol支部長）
「企業家としての助産師：Boholの経験」
Lourdes Mangahas（助産クリニック所長）
「個人事業（プライベートプラクティス）助産師の現況」
Gertrudes Calzada（IMAP Cebu支部長）
「パラダイムシフト：政府機関から個人事業へ」

フィリピン助産師のダンス

10月17日（火）　＜午前＞

全体講演　Dr. Alipui　（UNICEF 国代表）
「乳児死亡を減らすためのUNICEFの地球規模戦略」
講演　遠藤俊子（日本看護協会職能委員長）
「現在の日本の産科保健ケアの現状と助産師への期待」
Desley Williams（オーストラリア）
「母と子にやさしい保健サービス」
三澤寿美（新潟健康科学大学）
「日本の保健福祉を学ぶ学生のための包括的性教育」
Elizabeth Dumaran（保健開発センター）
「フィリピンの状況における行政助産師の誓約」

閉会式
挨拶　アジア太平洋地域代表、Asuncion Esmele IMAP副会長

2．フィリピンの助産師について

1）国の概要

フィリピン共和国は、東南アジアの島国。首都はマニラ。フィリピンの東にはフィリピン海が、西には南シナ海が、南にはセレベス海が広がります。日本とは、フィリピン海上で国境を接しています。人口は87,857,473人、国内総生産は世界第48位、2006年の乳児死亡率は22.81、2001年の妊産婦死亡率69.1です。

2）教育背景

開催国になったフィリピンの助産師について概要を紹介します。教育の体系では、助産師と看護師は別コースでいわゆる直行型（ダイレクトエントリー）の教育が行われています。1922年には６カ月コースの助産師教育でしたが、1932年には１年間、1976年に２年間（助産師学校入学には10年間の基礎教育が必要）、1998年に助産学の４年間の学士課程ができています。２年間の教育課程を経た者は遠隔教育にて学士取得の道が開かれています。2002年に助産師のための修士課程が設立されています。現在の総学校数は約140校です。

今回の講演のテーマにもありましたが、助産教育をより高等教育に位置つけることに非常に意欲的な様子でした。そして、フィィリピン独立助産師協会は1996年に財団を設置して、1999年に試験的に３年間の助産師学校を設立しています。カリキュラム、認証評価基準等も具体的指標ができており、教育レベルにより、業務、責任範囲が規定されています。これらは、公衆衛生看護

師、助産師、看護師で規定されています。資格取得は、教育課程終了後に助産師国家試験を受けなければなりません。

Patricia M. Gomez（フィリピン統合助産師協会会長）さんは、冒頭の挨拶でも、法律の整備と助産実践の質を上げ安全な実践と力を備えることが必要であると、特に熱く語ってしていました。この後に続いたフィリピンの助産教育の講演においてもそうしたフィリピン助産師が向かっている方向性に合致下者だったようです。

3）助産師の仕事ぶり

助産師数はフィリピン全体で約12万７千人、６年前に男性助産師が誕生して現在15名くらいだそうです。会場にも何人かの参加が見られました。助産師の働き方には大きく分けて２通りあります。政府に雇用されている、つまり日本でいうと公務員のような身分となる行政助産師です。１年間で550万人に出産を取り扱っています。政府は助産師がいない村にも助産師を配置できるように助産師を４万人にする計画を持っています。個人で事業を起こしてクリニックなどを経営している助産師です。後者は500-600カ所、半数が出産取り扱っていますが、上記プログラムの中出、Lourdes Mangahasの「個人事業（プライベートプラクティス）助産師の現況」によると、収入も高く、医師までも雇用しているとのことで、日本の開業助産師の形態とは少し違った様相です。

ミンダナオ島で助産師をしているLolita.I.Dicansさんから、行政助産師の働き方を次のように伺いました。

「助産師は各行政地区で登録します。すると自分が働く地区の病院と自動的に提携を結びます。異常が認められた場合は、助産師が判断してその地区の病院に妊産婦、新生児を搬送する事になっています。私は今バギオ市で、助産師全体のコーディネータをしています。市内には７つの病院（２つは公立、５つは民間病院）があり、みな助産師の搬送を受け入れる事になっています。この地区では年間6000件のお産があります。リスクのある人は最初から病院にかかります。女性たちの殆どが自宅で出産します。どうやってお産の介助に行くかって？みな歩きですよ。大体助産師は１kmから遠くても10kmの範囲の出産しか取り扱いません。助産師は女性に呼ばれると夜でも歩いて自宅に行きます。病院から助産師の搬送を断ることがあるかって？そんなことは内ですよ。そういうシステムだから。」

フィリピンと言うと、看護師、医師が海外に流出してしますということで問題にもなっていますが、助産師の場合はそれに関しては話題にはなっていませんでした。想像の範囲ですが海外流出がない故に、地域に根差した助産師パワーが全開という感じがしたのかも知れません。

3．その他のトピックス

1）ニュージーランドの事

フィリピン以外の国の助産師からの報告もとても興味深い者でした。ニュージーランド、オーストラリのスピーカーには承諾を得て、現在日本語版講演録を作成中です。次の学会誌には掲載させていただく予定です。

地域代表のSandy Greyさんは、日本助産学会松岡恵学会長の時のゲストスピーカーでしたのでご記憶の方も多いと思います。彼女から直接伺った話がとても印象的でしたのでお伝えします。1994年の法律改正で、ニュージーランドではすべてのお産には助産師が必ず立ち会うことになったそうです。妊産婦にリスクがあるかないかを判断するのは助産師。女性は一般医（general doctor）でも出産できますが、出産を取り扱う一般医（general doctor）は６ヶ月の産科認定コースを経た者でかつ助産師を４人雇用しなければならないとのことです。そのシステムのコンセプトは、マタニティ・ヘルス・ケアの提供者は助産師と看護師、医師はマタニティ・メディカル・ケアを提供するのが各々領分なので、女性にとっては医療が必要な場でもケアは必要だとい

う訳です。

2）アジア・太平洋地域会議の開催

15日夜、会場ホテル内で15名が集まりました。私は、時間変更後の場所を間違ったため、議事録から会議の内容を要約してお伝えさせていただきます。

・フィリピン会議が当初予定された12月開催が、急遽10月になったことの開催団体からのお詫び。
・会議開催経費については、ICMでは予算化はなく担当団体が調整するわけだが、会員団体はサポートを考える必要があること、また、次回の内容、場所時間はあらかじめ了承を得る事。
・次に３つの点について各団体で意見を述べ合った。

1．出産の行きすぎた医療化
2．分娩第３期の積極的管理に関する共同声明：協同作業のプロセスは評議会によって明らかにされなければならない
3．助産教育と登録について法律と基準が欠けていること

☆　ICMからのお知らせ　☆

2006年11月８日付けで「助産師、産婦人科医が妊産婦死亡を減少させるためのキャンペーンを進める」ための文書が来ています。世界の妊産婦死亡の30%を占める産後の出血を予防するために訓練を受けた出産介助人が児娩出１分以内にオキシトシンまたは子宮収縮剤を使用する、臍帯牽引する、胎盤娩出後に子宮マッサージをすることを勧めるというものです。詳細の内容は下記ホームページをご覧下さい。前回のブリスベン会議で議論になった話題で、本学会でもニュースレターでご紹介しています。　http://www.internationalmidwives.org/index.php?module
FIGO-ICM Joint statement on post-partum-haemorrhage (PPH)

☆　第28回ICM大会関連のお知らせ　☆

前回お知らせしました３年に１度の大会は、2008年６月１－５日に英国グラスゴーで開催されます。抄録の締め切りは、2007年３月30日（金）です。すべてオンライン投稿となります。発表種類は、１，ポスター　２，同時セッション　３，シンポジウム　４，ワークショップです。取り扱いテーマは、「女性の意見」、「母体と新生児の健康を考えた生殖および分娩技術」「助産技術の向上」「女性、新生児、そして彼らの家族の健康促進」です。事務局では、研究や斬新な実践、ドラマを用いた議論やデータベースを促進するような投稿を歓迎しています。すべての抄録は査読されます。受理された方は、2007年９月１日にシステムで確認できます。ホームページ・アドレスは下記です。割引のある事前予約は2007年９月17日、2008年３月１日までとあります。
http://www.midwives2008.org/home.htm

☆　国際シンポジウムのお知らせ　☆

テーマ：マタニティー政策をめぐる国際比較－女性の選択を保障するデザインを求めて
講　師：Raymond De Vries（ミシガン大学、社会学者、アメリカ合衆国）
　　Sirpa Wrede（ヘルシンキ大学、社会学者、フィンランド）
　　廣瀬健（上田市産院、産科医）
　　毛利多恵子（毛利助産所、助産師）
日　時：３月25日（日）13－17時
場　所：東京大学　山上会館（100名程度）日本語通訳あり
　　〒113-8654　文京区本郷7－3－1（事務局）TEL 03－3812－2111（代表）本郷キャンパス
参加費：資料代として1000円
主　催：独立行政法人日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業
　　豊かな人間像の獲得－グローバリズムの超克
　　グループ名　産育の現場からの考察　研究者代表　松岡悦子（旭川医大）
共　催：日本助産学会国際委員会
参加申し込み方法：３月16日（金）までに下記に参加希望を連絡
　　〒300－0331　茨城県稲敷郡阿見町阿見4669-2　茨城県立医療大学　看護学科
　　加納　尚美　FAX 029－840－2281　e-mail : kanou@ipu.ac.jp

Call for abstracts

ICM 28th Triennial Congress to be held in Glasgow 1-5 June 2008

The ICM Scientific and Professional Programme Committee (SPPC) in association with host organisation, the Royal College of Midwives UK

invites on-line submission of abstracts

for further details
and the online submission form
go to www.Midwives2008.org

4 main modes of presentation：
- Poster presentation
- Concurrent session
- Symposium
- Workshop

The Four Themes for Abstracts are：Women's Voices; Reproductive and Birth Technology in Maternal and Newborn Health; Strengthening Midwifery and Promoting the Health of Women; and, Newborn & Families.

The SPPC are particularly interest in submissions promoting discussion and debate：based on research or innovative practice; and using stories or drama

Deadline for submission of abstract is Friday 30th March 2007 (midnight GMT)

Authors must identify the types of presentation they wish to give, and may be offered a mode of presentation that differs from their preferred choice.

Full instructions for Authors and Criteria for Abstract Selection can be found on the web site given above. The SPPC's decision is final and it is not possible to enter into negotiation with authors once the Congress program has been finalised.

All submissions will be peer-reviewed.

Find out if your submission has been accepted for presentation by logging onto system on 1 September 2007.

Registration for the conference is a requirement for ALL presenters and a pre-requisite to an abstract to be reproduced within the conference documentation

日本学術会議ニュース・メール　No.51　2006/12/05 発行

++

学術会議叢書13「科学のミスコンダクト－科学者コミュニティの自律をめざして－」
財団法人 日本学術協力財団から刊行（お知らせ）

++

論文やデータの捏造、改ざん、盗用等の科学上の不正が後を絶ちません。

日本学術会議では、18期以降、不正行為の防止は科学者コミュニティが果たすべき社会に対する重大な責任であることを指摘し、具体案の作成が必要であることを提言してきました。

第19期では、その提言を受け、国内学協会の倫理に対する取組みの現状を調査するとともに、社会規範からの逸脱行為も視野に入れたミスコンダクトの防止策と事後処理の制度等を調査・検討し、対外報告を公表しました。同時に2005年7月4日に公開講演会を行って、各分野での課題についての講演とパネルディスカッションによって科学者の自律とミスコンダクトの防止に向けての議論を深めました。

標記学術会議叢書（http://www.h4.dion.ne.jp/%7Ejssf/text/tosyo/sousyo13.html）は、この公開講演会の講演録を主体とし、その後行われた「学術の動向」での座談会内容と第20期に作成された「科学者の行動規範暫定版」を収録したものです。科学者自身がミスコンダクトの防止策を提言したものとして、各方面で活用していただければ幸いです。

【お申込み及び問い合わせ先】
財団法人日本学術協力財団
電話03－5410－0242、Fax 03－5410－1822、E-mail：jssf@pro.odn.ne.jp

==========

日本学術会議ニュースメールは、日本学術会議第20期会員・連携会員、日本学術会議協力学術研究団体に配信しています。転載は自由ですので、関係団体の学術誌等への転載や関係団体の構成員への転送等をしていただき、より多くの方にお読みいただけるようにお取り計らいください。

発行：日本学術会議事務局　http://www.scj.go.jp/　〒106－8555 東京都港区六本木7－22－34

==========

日本母子ケア研究会

第８回学術・実践報告会のご案内
“母と子の心を癒す母乳育児支援”

日　時　　平成19年７月１日（日）
会　場　　はまぎんホール　ヴィアマーレ
参加費　　会員：¥5,000　　非会員：¥7,000　　当日参加：¥8,000
※６/22（金）日付以降の入金は会員・非会員に関わらず、当日扱い¥8,000になります。
お問い合わせ　　日本母子ケア研究会事務局　　担当：増田
FAX　03－3563－0074　　E-Mail　info@boshicare.com
ご連絡は、FAXまたはE-mailでお願いします。

事務局からのお知らせ

平成19年度会費（10,000円）納入について

次年度の年会費納入時期になりました。当学会は皆様の会費で運営されています。年度前払いをお願いいたします。

・口座引落をご利用の方は、平成19年３月23日（金）の引き落としまでに口座の残高に余裕があることをご確認下さい。会費引き落とし用の口座の管理をお願いいたします。

・郵便振込をご利用の方は、３月末（遅くとも４月末）のお振込をお願いいたします。

振込先は下記まで（郵便局備え付けの振込用紙を利用するか、同封の振込用紙を利用してください）

振替口座番号：００１００－５－８３２４４　　加入者名：日本助産学会

新たに口座引き落としをご希望の方は、書類をお送りいたしますのでお知らせ下さい。

変更届および退会届について

住所・姓・勤務先および送付先等、変更の場合は必ずお早めにお知らせください。変更後の連絡がないと、当学会からの緒情報をお届けすることができません。また、退会希望の場合は必ず退会届をご提出願います。変更・退会届の書式を日本助産学会ホームページ（http://square.umin.ac.jp/jam/）からダウンロードして書き込みの上FAX（03－3221－0417）かE-mail（jam1987@ninus.ocn.ne.jp）に添付してお知らせください。

・次年度（平成19年度）から退会希望の方は、必ず今年度中（３月末まで）に退会をお知らせ下さい。

ご連絡がない場合は会員継続とみなし平成19年度分の年会費をお納めいただくことになります。

・口座引落ご利用の方で平成19年度から退会を希望する場合は、なるべく早急に（遅くとも２月20日までに）必ずご連絡下さい。それ以降は、口座引き落としの解約手続きが間に合いませんのでご注意下さい！

・平成19年２月20日までに退会の連絡がないまま引き落とされた会費につきましては、会則第７条（三）にありますようにお返しできませんので、次年度退会希望の方は特に早めのご連絡をお願いいたします。

・会費引き落とし口座のご変更（特に姓変更された方（名義人名変更）・口座番号変更・取引金融機関変更等）がありましたら、再登録か現登録データ削除の必要がありますので必ず事務局にご連絡下さい。（連絡がないとデータを削除できないまま取引なしエラーになり手数料（助産学会負担）だけ引かれますので必ず連絡下さい）

円滑な事業推進にご協力下さいますよう、どうぞよろしくお願いします。

平成19年度　日本助産学会研究公募のお知らせ

平成19年度助産学会の公募は平成18年12月22日に締め切りましたが、応募が少なく再度募集をする事にしました。

公募要領は、ニュースレターNo.51にでております。締め切りは平成19年１月31日です。応募をお待ちしております。

（文責：学術振興委員会委員長　加藤尚美）

学会誌バックナンバー無料化と書籍販売のお知らせ

・日本助産学会誌バックナンバー第１巻～第16巻を、送料分申込者負担で無料配布しています。
・第17巻から19巻に関しては、１部あたり2,500円（送料分申込者負担）です。
・日本助産学会委託研究・学術奨励金助成研究報告書（平成12～14年度第１号）１部300円（送料分申込者負担）
・母子に優しいケアを実現するために－口演集－　１部あたり300円（送料分申込者負担）

申込み方法は、日本助産学会ホームページ（http://square.umin.ac.jp/jam/）から申込書をダウンロードして書き込みの上FAX（03－3221－0417）かE-mail（jam1987@ninus.ocn.ne.jp）に添付してお申し込みください。また、在庫に限りがありますのでご希望に添えない場合がありますことをご了承願います。

《連絡先》日本助産学会事務局
〒102-0071　東京都千代田区富士見1－8－21　東京都助産師会館３階
TEL&FAX：03－3221－0417
E-mail：jam1987@ninus.ocn.ne.jp
URL　：http://square.umin.ac.jp/jam/

＊＊＊募金のお願い＊＊＊

本学会では下記の募金を受付けています。会員の皆様のご協力をお待ちしています。

＊ICMスポンサー・ア・ミッドワイフ（国際基金）の募金について
発展途上国の助産師の参加用援助としての募金です。一口2,000円です。

振替口座番号：00190-8-710931
加 入 者 名：日本助産学会国際基金

＊セーフマザーフッド基金の募金について
世界で妊婦死亡率および罹病率が最も高い地域における助産の知識の発展を支援するための募金です。一口1,000円です。

振替口座番号：00240-8-6818
加 入 者 名：日本助産学会ICMセーフマザーフッド基金

今回は、多賀佳子様、匿名１名、徳島大学「国際助産師の日」事業促進会より募金にご協力いただきました。
ありがとうございました。

引き続き 皆様の暖かいご支援とご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。